

(136) 群馬県桐生市の梅田鉱山

群馬県桐生市立図書館で、赤沢鉱山に関する文献と共に、白沢鉱山の関する文献（１）も入手していた。この文献に、図「白沢鉱山周辺の地質」があり、白沢鉱山の文字が図中に記されていた。非常に大雑把な位置指定であったが、これを手引きに、現地の大雑把な見当を付けて、初回の探査を行った。が、天候には恵まれてはいたが、全くの空振りであった。

その後、群馬県沼田市の白沢鉱山に関する資料を探して、沼田市の白沢鉱山における産出鉱物の研究論文である参考文献（２）と共に、桐生市の梅田鉱山における産出鉱物に関する参考文献（３）を見つけた。これら２つの文献は、共に群馬大学大学院教育研究科の同じ研究室の修士論文である。両論文共に、研究対象の鉱山の位置なども含め、詳細な説明が行われていた。これらの資料を手引きにすれば、両鉱山とも探査は容易であろう。小山からだ、沼田の奥にある白沢鉱山は、桐生の山沿いにある梅田鉱山と比較すると、車では時間がかかる。というわけで、当初は、白沢鉱山の探査を考えていたのであるが、梅沢鉱山の方を先に探査することとした。文献（３）のおかげで探査は容易であった。現地を確認した。坑口、ズリも確認した。文献（３）によれば、この梅田鉱山は、タングステン鉱山であり、多くのマンガン鉱山がある足尾山塊中の中では特異なそうである。詳細は参考文献（３）に譲る。

現地への経路は次の通りである。桐生市内から、６６号線に入り、桐生川ダムの所で、３３７号に入り、桐生川に沿って北上していく。道幅は次第に狭くなり、「津久原橋」を渡った少し先の右側に、現地の入口となる赤い小さな鉄橋が、桐生川に架かっている。後掲の写真参照。ここから支流沢の左岸を上り上がること、２０分から３０分で、現地に達する。沢の右岸少し上に、石垣、ズリ、小口がある。

探査日 ２０１４年５月

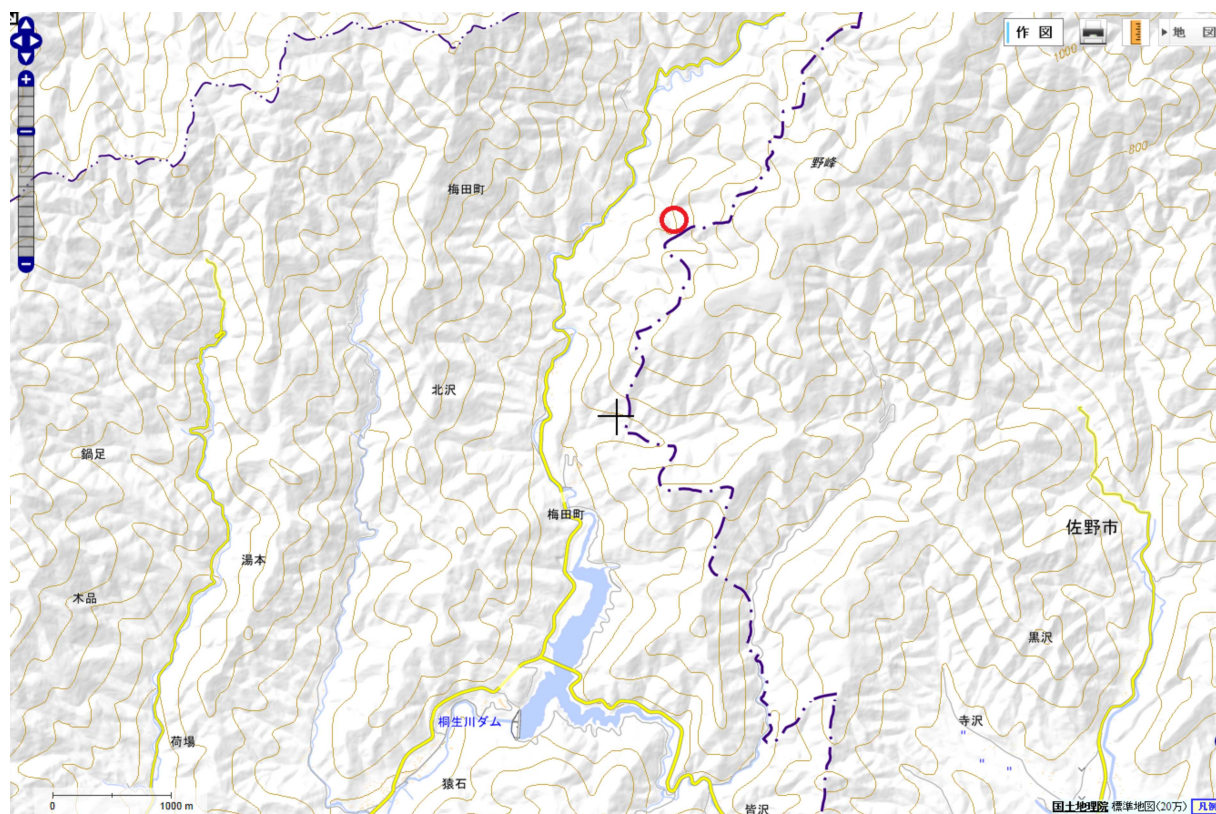


図１ 国土地理院の地図サービスより複写掲載。赤丸が梅田鉱山跡。桐生川ダムの北方に位置する。



図2 図1の部分の拡大図に相当。Pが駐車場。沢に沿った黒細線が山道。黄緑丸が坑口跡。茶ベタがズリ。

鉱山跡写真

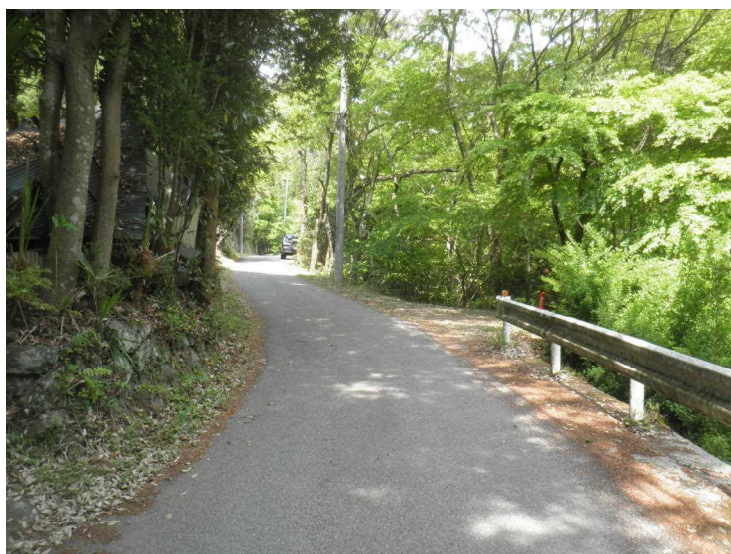


写真1 桐生市内から、66号線に入り、北北東に進んでいく。桐生川ダムを右手に見て、337号に入り、さらに桐生川に沿って、進んでいく。そのうちに、左手に清風園を見る。そして少し先で、「津久原橋」を渡る。道は狭くなる。橋を渡ったら、道路の右側に留意して進んでいく。写真のように、道路の右側に小さい空き地があり、沢に赤色の幅の狭い歩道鉄橋が架かっているのが見える。現地への入口である。この箇所に車数台は駐車できる。道路の左側は廃屋。



写真 2 桐生川に、赤色に塗られた狭い歩道鉄橋が架かっている。この橋を渡り、左に進んでいくと、直ぐに桐生川に流れ込んでいる支流沢に達する。この支流沢の左岸に沿って、まだ生きている山道を登り上がって行く。途中、山道は沢から離れ、杉林の中を進むようになるが、また沢に沿って進むようになる。



写真 3 現地は沢の右岸の少し上にある。石垣組、プラトー、坑口、ズリ。写真は石垣組と坑口を示している。



写真 4 坑口の内の一つの内部の様子。



写真5 別の坑口の入口の様子。
入口付近に土砂が積み重なっているため
であろう、排水がせき止められて、
内部に溜まっている。



写真6 テラス状の所で、坑口
跡を見る。

鉱物写真



写真7 坑口跡の1つの入口部分
では、天井に石英鉱脈を見ることができ
る。幅は20cmぐらいか。坑道に沿っ
て奥に伸びている。この脈に沿って、坑
道を開削したのであろう。一見の価値が
あろう。テラス周りのズリには、鉱染状
岩石は豊富である。良い標本を採集でき
るかどうかは努力次第か。

参考文献

（１）「群馬県沼田市白沢町の蛍石を伴う鉍床中の鉍物について」、吉川、佐々木孝、大場、群馬大学教育学部紀要 自然科学編、第５９巻、５５頁～７０頁、２０１１年。

（２）「群馬県沼田市白沢鉍山の鉍物と鉍床に関する基礎研究」、佐々木孝、群馬大学大学院教育研究科修士論文、２００８年。（群馬大学中央図書館書庫在）

（３）「群馬県桐生市の梅田鉍山のタングステン鉍山と鉍床についての基礎研究」、土佐純一、群馬大学大学院教育研究科修士論文、２０１２年。（群馬大学中央図書館書庫在）